

ブレイクとゴードン騒乱

——若きブレイクの政治意識

松島正一

1

一七七八年六月、英国下院議會においてジョージ・セイヴィル卿の法案「カトリック救済法」が両院を通過した。英国国教会が国教となつて以来、英国ではその他の宗派は様々な差別・迫害を受けてきた。この救済法は名譽革命以来とりわけ酷い差別を受けてきたローマ・カトリック教徒への差別を緩和するためのものであった。しかし、この法案はカトリック教徒が土地所有権とか相続権を奪われていたのを緩和しただけで、カトリック教徒は依然として公職からは締め出されていた。ところが、この法案に反対するプロテスタントの人々は各地で組織を結成し、反対運動を展開し始めた。この法案はスコットランドの長老派を刺激し、一七七九年にはエディンバラやグラスゴーでは法案反対の実力行使さえ始まった。ジョージ・ゴードン卿（一七五一—一七九三）

はスコットランドやロンドンのプロテスタント連盟会長となり、議会で法案の廃止を請願した。

一七八〇年六月二日、この日は金曜日であったが、ゴードン卿が先頭に立って法案廃止のための下院への請願行進が行われた。下院ではこの法案の審議を翌週の火曜日(六日)と決めた。下院議員の大多数は法案撤回の意志はなかったようである。これに対して彼らデモ隊のスローガンは「カトリック法反対」("No Popery")であった。デモ隊の数は、主催者ゴードン卿の二万人程度との予想を大きく上回る六万人であった。

行進は最初は穏やかに行われていたが、国会議事堂に近づくにつれ、どこからともなく得体の知れない人々がこの行進に加わってきた。国会議員数名を乗せた馬車が議事堂に到着する二時頃には、煽動された群衆は無秩序で手に負えない暴徒と化してしまっていた。上院議員の何人かは暴徒に襲撃され、泥を投げられたりもした。事態の急変に驚いた平和的な請願者たちはその場を離れたが、およそ一万八千人が議事堂周辺に残り、彼らの暴力は手に負えないものとなってしまった。暴徒は無知で無思想で偏屈な者、犯罪者から成り立っていたので、一層危険な状態になった。

暴徒が上院の扉を壊している間、ゴードン卿は下院に請願書を提出していた。ゴードン卿と下院との間で激しいやりとりが続ぎ、しばしばゴードン卿はロビーを見下ろす廊下にやって来て、下の群衆に煽動的な情報や大声で叫んだ。ゴードン卿の態度を見ていた群衆は、卿の宗教的情熱が高じて前後の見境もつかない狂信的行為になったのだ、と信じて疑わなかった。

この頃には、すでに九十八名の議員が議会に到着していた。請願をすぐに採択しろというゴードン卿の動議は、彼を含めて僅か八名の賛同者しか得られなかった。この事実が外の群衆に取り次がれ知らされた時には、

すでに議員の多くは刀を抜いており、身の安全のためには闘う必要もあるかもしれない、と覚悟をしていたようだ。そこに折よく、二人の裁判官に付き添われて軽騎兵と歩兵が混ざった分遣隊が到着し、幸いにも群衆を説得して解散させることに成功し、衝突は回避することができた。

請願にのみ関心を抱いていた大多数の者はすでに帰宅していたが、残った者はその晩、ロンドンの路上で暴れだした。カトリック教会はロンドンでは禁じられていたが、外交官の屋敷の礼拝所に英国人カトリック教徒が出入りするのは認められていた。斧や鋤やハンマーなどで武装した暴徒が、最初に襲ったのはリンカーンズ・インにあるサルディーニア王国大使館のカトリック礼拝堂で、さらにゴールデン・スクウェアにあるカトリック礼拝堂も破壊された。翌日、暴動は治まったかに見えたが、夜半になると再び騒がしくなった。五日には、法案の提出者セイヴィル卿が脅迫された。六日は法案審議の日であったが、下院はデモ隊に囲まれ、審議は八日に延期された。翌日の七日（水曜日）に暴動は頂点に達し「黒い水曜日」の名でイギリス史でも有名な日となっている。結局、暴動は五日五晩続き八日の夜までには鎮圧されたが、少なくとも三百人の暴徒が殺されたという。

これが主宰者の名をとって「ゴードン騒乱」(Gordon Riots)と呼ばれる反カトリック暴動事件であった。チャールズ・ディケンズの『バーナビー・ラッジ』(一八四一)がこの事件を扱った歴史小説であるのは、よく知られている。

最初はカトリックの建物や集会場、大臣、裁判官ハイドの邸宅などに向けられた暴徒たちの襲撃は、やがてお偉ら方の住居や公共の建物にも向けられることとなった。レスター・フィールドで裁判官ハイドの家を壊し

た暴徒たちは、ロング・アークに沿って進み、ブレイクが徒弟として住み込んでいたバザリアの店の前を通り、ホルボンへと進み、ニューゲイト監獄に向かった。ニューゲイト監獄、隣のブライドウエル拘置所、新しくできた克蘭ウエル監獄などが襲撃され、そこに居た囚人たちが解放された。特に借金で入獄した者は救うことにしようだ。また、トマス・ラングデイルの蒸溜酒製造場が略奪され、火をつけられた。蔵に貯蔵されていた酒が炎上し、路上には原酒がばらまかれ、酔っ払った暴徒のなかには自分たちのつけた火の中で死ぬ者もでた。始末であった。婦人、子供を含めて約百人の死者が出たという話も残っている。

ゴードン騒乱では、暴徒は意図的に富裕なカトリック教徒の財産を攻撃したのは明らかである。貧しいアイランド人には、彼らがすぐそばにいても、その財産には手をつけなかった。公判に付された被告に関する中央刑事裁判所「訴訟記録」の中には、富裕なプロテスタントの家に損害を与えたことを認めたある男が、「しかし（彼が法廷で述べたように）プロテスタントであろうとなかろうと、いかなる紳士も年千ポンド以上の収入を得る必要はない。千ポンドあれば、どんな紳士も十分に暮らしていける」と述べたという例があがっている。

暴徒に破壊された家のなかにマンスフィールド卿（一七〇五―九三）の家があった。卿は一六五六年から八八年まで王座裁判所の長官を務め、商事事件にコモン・ローを採用することに成功した実力者であった。

卿はハムステッドの「ケンウッド・ハウス」を夏の居住地として利用していた。市内で暴れた暴徒たちは余勢をかって「ケンウッド・ハウス」も襲撃の目標とし、ロンドン市内から北方のハムステッドに向かった。記録によると、暴徒は五千人、その後を六千人の兵隊が追いかけてきた。「ケンウッド・ハウス」の手前には居

酒屋「スバニヤード・イン」（現在もバブとして利用されている）があり、暴徒たちは一息入れるためにここに立ち寄った。居酒屋の主人ジル・トマスは暴徒たちの目的を察して、彼らに無料で酒をどんどん提供した。さらにトマスは「ケンウッド・ハウス」の召し使いジョン・ハンターに伝言を送り、館の酒蔵からあるだけの酒を持ってくるように頼んだ。ロンドンからハムステッドまでの長い道のりを喉をからして歩いてきた暴徒たちは、ただ酒のもてなしを喜んだ。兵隊が追いついた頃には、すっかり御機嫌となった暴徒たちは襲撃の目的を忘れて、千鳥足でロンドン市内へと帰っていった。

マンスフィールド卿はブルームズベリー・スクウェアの邸宅が破壊されたことはそれほど嘆かなかったそうだが、「ケンウッド・ハウス」とそこにある貴重品がジル・トマスの機転で破壊を免れたことを感謝したという。以後、マンスフィールド卿夫妻はここ、「ケンウッド・ハウス」を終の住家とした（以上、「ケンウッド・ハウス」をめぐる話はメアリ・C・ポーラー『ハムステッドとハイゲイト——丘の上の二つの村の物語』（一九七六）による）。

騒乱の首謀者ゴードン卿は九日には逮捕され、ロンドン塔に送られた。ゴードン騒乱の裁判は一七八一年二月に行われ、マンスフィールド卿が裁判長として「大逆罪」(High Treason)で告訴されたゴードン卿の裁判の法廷についた。この法廷には、マンスフィールド卿の隣人であるアースキン卿（二七五〇—一八三二）がゴードン卿の弁護に立った。アースキン卿は民主的な思想の持ち主で、「法定叛逆罪」「文書誹毀罪」などの濫用に反対し、イギリスにおける基本的人権の確立に貢献した法律家として歴史に名を残している。アースキン卿はゴードン卿が群衆を煽動した事実を認め、また「カトリック反対」と叫びはしたが、国王殺害を計ったり、国王の兵隊に戦闘をしかける意図はなかった、と告訴を否定し、ゴードン卿の無実を主張した。付言すれば、ゴ

ドン卿はのちにフランス革命を支持し、そのために入獄し、獄中でユダヤ教に改宗し、一七九三年に死んだ。ゴードン騒乱での詳しい統計は残っていないが、わかっているのは逮捕者四百五十名、起訴百六十名、そのうち六十二名が死刑の判決を受け、二十五名が死刑を執行された。そのなかには、婦人四名、十六歳の少年一名が含まれていた。これら起訴された人たちの職業はよくわかっていないが、大部分の者が最下層の労働者ではなかったという事実は注目値する。

ゴードン騒乱の背景には次のようなことがあった。まず、この事件がアメリカ独立戦争（一七七六―一八三三）の最中に起ったということである。イギリス軍は一七七七年十月、サラトガの戦いで敗れ、形勢不利であった。暴徒たちは国王がアメリカ人を抑えるためにカトリック教徒を利用していると確信していた。また、カトリック教徒の軍隊がカナダ、スコットランド、アイルランドで兵を起こし、多くのカトリック教徒が圧制の代理人として高い地位についているという噂が広まっていた。

ロンドンのシテイの人々のなかにはジョージ三世の対米政策を快く思っていない者も多かった。ゴードン騒乱の背後にはシテイ一派の存在が指摘されているが、雇われた暴徒たちはやり過ぎてしまったようだ。つまり、この暴動がジョージ三世および政府の窮状を逆に助けてしまうという皮肉な結果になってしまったのである。

ロンドンの職人や職工がアメリカ植民地の人々のイギリスに対する反逆に共感を抱き、ジョージ三世の政府に反抗したウィルクスを支持したことはよく知られている。ニューゲイト監獄を焼き打ちにした暴徒たちの先頭の一人に当時二十二歳のウィリアム・ブレイク（一七五七―一八二七）がいたことは興味深い。彼はバザイアーのもとで彫版師としての修業に励んでいた。彼は偶々、群衆の先頭に出てしまったようであるが、目前で監

獄が焼け落ちるのを見た。ギルクリストの伝記によると、ブレイクは「何気なく参加した」ということだが、関心がなければ店の前からニューゲイト監獄まで付いていくはずはない。職人ブレイクが暴徒たちに少なからず共感を抱いていたのは、まちがいない。この暴動はブレイクの心に強い印象を与え、後の作品における「赤い炎」のイメージの原点になったと思われる。

画家フランシス・ウィートリ（Francis Wheatley, 一七四七—一八〇二）はゴードン騒乱におけるブロード・ストリートの暴動を描いているが、この絵はジェームズ・ヒース（一七五七—一八三四）によって彫版され、好評を博した。詩人では、ウィリアム・クーパー（一七三二—一八〇〇）が「一七八〇年六月、暴徒たちによって稿本とともに消失したマンスフィールド卿の蔵書について」（“On the Burning of Lord Mansfield's Library, Together with His Mass. by the Mob, in the month of June, 1780”）とさう十二行の詩を残しているが、クーパーは暴徒たちを激しく非難している。

So then —the Vandals of our isle,
Sworn foes to sense and law,
Have burnt to dust a nobler pile
Than ever Roman saw!

And Murry sighs o'er Pope and Swift,
And many a treasure more,
The well-judged purchase, and the gift

That graced his letter'd store.

Their pages mangled, burnt, and torn,

The loss was his alone;

But ages yet to come shall mourn

The burning of his own.

そうあの時——我が島国の蛮人どもと

分別と法を忘れた敵どもは

ローマもかつてしなかったほどに

営々たる大建築物を灰塵に帰させた。

出版者マレーは吐息をつく。焼失したボードとスウィフトに、

さらに多くの宝物に

時宜を得た買い物に、教養ある蓄えを

飾る贈り物にたいして。

書物は切られ、焼かれ、千切られた、

その損失は彼だけのものではあつた。

だが、来るべき時代は嘆くであらう

彼自身の焼失を。

十八世紀の暴動は労働争議より食糧暴動であった。ジョージ・リューデによれば、一七三〇年から一七九五年の間の、新聞に報道された三七五件のあらゆる種類の暴動のうちで、二七五件が食糧暴動であったという(『イデオロギーと民衆抗議』、訳一六九頁)。貧民の収入の三分の一もしくは二分の一が、主食のパン代に費やされたといわれているから、小麦の不作は彼らにとっては死活問題であった。ロンドンでは例外的に一七一四年から一七九〇年代中期まで食糧暴動はまったくなかったが、ゴードン騒乱は十八世紀イギリスにおける都市暴動の帰着点であった。

十八世紀イギリスの都市暴動をさかのぼってみると、一七三六年七月、イングランド人労働者を解雇して、賃金の安いアイルランド人労働者を雇い入れたことに反対し、ショーディッチ、スピトゥルフィールズ、ホワイト・チャペルなどで、アイルランド人に対する激しい暴動が起こった。また、一七六〇年代から七〇年代の十数年にわたって続く、ウィルクス派の暴動が有名である。これは一七六三年にロンドン塔に監禁されていたジョン・ウィルクスが釈放された時に始まる。「ウィルクスと自由!」(“Wilkes & Liberty”)が彼らのスローガンであった。ロンドンの職人や職工は植民地アメリカの人々のイギリスに対する反逆に共感を抱き、ジョージ三世政府に反抗するウィルクスを支持した。ブレイクの『アメリカ』や『ディリエル』にはアメリカを失っておろおろしているジョージ三世が風刺されている。

2

ブレイクの処女詩集『詩的素描』は、彼の少年時代の感情を読み取ることのできる作品である。なかでも「ノルウェー王ゲウイン」（「Gwin King of Norway」）は百行余りのバラッドであるが、ブレイクの初期の政治意識・革命観を知る上で興味深い作品である。

このバラッドは「来たれ、王たちよ、我が歌を聞け」という王たちに教訓を与える科白で始まる。ゲウイン王は北方の民族に対して「暴虐な支配権」（His cruel sceptre）を振るうとあるが、これは明らかに当時の英国王ジョージ三世のアメリカに対する圧制を暗示している。バラッドでは、飢えた貧民の血を絞って安穩たる生活を送っているノルウェーの貴族たちの姿が、次のように描かれている。

The Nobles of the land did feed
Upon the hungry Poor;

They tear the poor man's lamb, and drive

The needy from their door!

その国の貴族たちは

飢えた貧民の血を絞って生活した。

彼らは貧民の子羊を奪い屠って食し、

困窮者を戸口から追い出す。

このような現実に対して人民が立ち上がり、こう叫ぶ。

“The land is desolate; our wives

“And children cry for bread;

“Arise, and pull the tyrant down!

“Let Gwin be humbled!”

「大地を荒廃してゐる。我々の

妻子はパンが欲しいと泣き叫ぶ。」

「蜂起せよ！ 暴君を引きずりおろせ！

グウィンを王位から追ひ払え！」

この人民の叫びが眠れる「巨人」ゴードレッドを目覚めさせる。ゴードレッドはトマス・チャタトンの「ゴードレッド・クロヴァン」(“Godred Crovan”)から、その名をとつたと思われる。

人民の叫びに応じて、たちまちのうちに大勢の人々が集合する。男たちは軍勢の後に従い王宮へと行進し、その後を女や子供たちが泣き叫びながらついて行く。

“Pull down the tyrant to the dust,

“Let Gwin be humbled,”

They cry, “and let thousand lives

“Pay for the tyrant's head.”

「暴君を引きずりおろせ、

グウィン王位から追い払え。」

人々は叫ぶ。「一万人の生命を犠牲にしても

暴君の首をとろう。」

押し寄せる軍勢に気づいた塔の見張りの知らせで、グウィン王は部下の兵士たちを集めて戦闘態勢につかせる。王に属する首領たちも各地から王のもとに馳せ参じるが、彼らには死の影が帯びている。軍勢を指揮する王の周囲には「疫病が飛びかい」、王もまた「夜の暗闇」（＝経験界）の中にいるのがわかる。

バラッドは王制の打倒と兵士たちの敗北を扱っている。グウィン王の陣営に対して、ゴードレッド側は民兵を中心としているので、職業軍人を民兵が敗ったことになる。

The husbandman does leave his plow,

To wade thro' fields of gore;

The merchant bind his brows in steel,

And leaves the trading shore;

The shepherd leaves his mellow pipe,

And sounds the trumpet shrill;

The workman throws his hammer down

To heave the bloody bill.

農夫は鋤を捨て

血の戦場を進む。

商人は頭に胃をいだし、

商売の場を離れる。

羊飼いは美しい笛を捨て、

ラッパをかん高く鳴らす。

職人はハンマーを投げ捨て

血の鎌を振り上げる。

農夫、商人、羊飼い、職人らを統率する存在として、ゴードレッドが闘士サムソンのごとくに聳えたっている。ここには巨人伝説を見ることが出来るであろう。人民の願望としてのゴードレッドの姿は、各自のなかにある神性なものを表わしている。ブレイクの言葉で言うところ、ゴードレッドは「神性な人間の形」(“Human From Divine”)を象徴していることになる。

対するグウィン王は世界に悲慘を生み出し、人々に圧制を強いる者、ブレイクの後の作品に登場するユリゼンの姿をとっている。グウィンは北方の支配者であるが、ユリゼンの方位は北である。また、このバラッドには「雲」「海」のイメージが頻出するが、これらは群衆や軍勢の象徴であるとともに、ユリゼンの属性を表わす象徴でもあることに気づくのである。

バラッドの戦闘場面は、後の『預言書』を思い出させる。

And on the verge of this wild sea

Famine and death doth cry;

The cries of women and of babes

Over the field doth fly.

そしてこの荒海の端で

飢餓と死が叫ぶ。

女と赤子たちの叫び声が

戦場の上を飛ぶ。

「飢餓と死が叫ぶ」というような表現は『預言書』によく現われるものである。このバラッドを通じて荒廃のイメージが濃厚であるが、これは同じ詩集に収められている『冬に』を想起させる。グウィン王に支配される冬（＝死）の世界、そこに春（＝救済）をもたらす者としてのゴードレッド。この対決はブレイクの神話体系でいえば、ユリゼンとオーク（またはロス）のそれである。

ついにゴードレッドとグウィンが合戦し、ゴードレッドがグウィンの頭を「額から胸まで」割った。このバラッドはフランス革命におけるルイ十六世の処刑以前に執筆されたものだが、ギロチンによる王の処刑を想起させる。

この作品の主張は次の二連に凝縮されている。

The god of war is drunk with blood;

The earth doth faint and fail;
The stench of blood makes sick the heav'ns;
Ghosts glut the throat of hell!

O what have Kings to answer for,
Before that awful throne!
When thousand deaths for vengeance cry,
And ghosts accusing groan!

戦さの神は血で酔つてゐる。
大地は弱り衰える。
血の臭いが天をむかつかせ、
亡霊が地獄の喉を塞ぐ。

王たちは責任を負うべき何を持つか、

あの恐ろしい玉座の前で！

幾千もの死が復讐を求めて叫び、

亡霊が咎めだてをして呻くときに！

ブレイクがノルウェー王だけでなく、すべての王制を攻撃の射程に入れているのがわかる。王制打倒のために幾千もの生命が犠牲となったが、それらが亡霊となって王制を咎めている。彼らの尊い犠牲は今こそ贖われるのであるという黙示録的な主張に、ブレイクの政治意識が人間の解放と結びついていることがわかる。

初期のブレイクの王政に対する抗議は、同じ詩集の「王政はアルビヨンの子どもらの血糊でその美しい胸を汚してきた」（「ジョン王への序詞」という言葉のなかにもみられる。また、ブレイクは一七八四年、王立美術院に「天使によって鎖を解かれた戦争——火災、疫病、飢餓が強く」「都市の破壊——戦いの習朝」という二枚の絵を出品している。この二枚の絵のなかにブレイクの「戦争」「戦い」に対する激しい感情をみることができる。

後にブレイクが対仏戦争の間に書いたといわれる『無垢の前兆』（“Auguries of Innocence”）には、彼の成熟した思想をみることができる。

A dog starv'd at his Master's Gate
Predicts the ruin of the State.

A Horse misus'd upon the Road
Calls to Heaven for Human Blood.

主人の門で飢えてゐる犬は
その国の滅亡を予言する。
路上で虐使されている馬は
人間の血を神に呼び求める。

ブレイクの国家権力に対する闘いは初期から一貫している。「無垢」と「経験」との対立を描いた後、ブレイクは『預言書』に取り組んでいくが、その世界は彼の創造した神話的人物を通じての権力闘争であり、その

ブレイクとゴードン騒乱（松島）

最終的な勝利はロスによって獲得される。

（英米文学科
教授）